



記入日 2013年1月15日

1. 概要

実践団体名	NPO 法人大杉谷自然学校		
連絡先	0598-78-8888		
プランタイトル	豪雨災害被害地からの実践的防災教育		
プランの対象者※1	小学校高学年 中学校・社会人一般	対象とする 災害種別※2	水害

【プランの目的・ここがポイント!】

豪雨災害被災地である経験を生かした防災教育プログラムを開発する
大台町では平成16年と平成23年に豪雨災害に見舞われ甚大な被害を受けた。災害直後からその自然の驚異を伝えるため、災害地見学や被災地での聞き取り調査活動を教育プログラムとして提供してきた。
最近では山間地での豪雨災害が増加してきたため、当地での教育プログラムを完成させて、多くの被災地でも実践可能な内容を示したい。

【プランの概要】

平成24年7月25日—27日の大台町立日進小学校の夏期体験のうち、防災教育として26日の民泊先での聞き取り調査と27日の災害地見学を行った。この実践活動のために学校との打合せ及び地域の被災者の方との打合せ等も実施した。
平成25年1月からNPO法人みえ防災市民会議会の専門家からアドバイスをいただき、これまで実施した防災教育プログラムのブラッシュアップと新規プログラム開発を実施した。

【期待される効果・ここがおすすめ!】

被災地で体験プログラムを開発することにより、より実践的で体験者にも追体験しやすい内容を提供することができる。

2. プランの年間活動記録 (2012 年)

	プランの 立案と調整	準備活動	実践活動
4月	防災教育プログラム作成	企画書作成・修正 学校打合せ	学校での打合せ 児童の様子聞き取り
6月	防災教育プログラム作成	企画書・依頼文作成 災害現場確認 講師選定	災害地見学下見 災害講師打ち合わせ 民泊の方打合せ
7月	防災教育プログラム実施	事前の安全確認	事前準備 当日運営
12月	防災教育プログラム改善・新規作成	アドバイザー選定	アドバイザー選定・依頼
1月	防災教育プログラム改善・新規作成会議実施	アドバイザー依頼 学校への聞きとり 調査	アドバイザーとの会議 学校への聞き取り調査
2月	防災教育プログラム新規作成	教材開発	防災教育プログラム作成
3月	防災教育プログラム新規作成会議実施	アドバイザー依頼 教材開発	防災教育プログラム完成

3. 実践したプランの内容と成果

【実践プログラム番号： _____】※3

タイトル	大台町立日進小学校防災教育プログラム
実施月日（曜日）	平成 24 年 7 月 26 日（木）・27 日（金）
実施場所	三重県多気郡大台町岩井
担当者または講師	担当者・講師等の区分：担当者 氏 名：大西かおり 所属・役職等：NPO 法人大杉谷自然学校・校長
所要時間	4 時間
プログラムの形式※4	その他学校内での時間
活動目的※5	防災に関する知識を深める
達成目標	度重なる豪雨災害から身を守るための知識を身につけるため、被災地見学や被災者の方のインタビューを通じて、豪雨災害を学ぶ。 小学高学年向けの防災教育プログラムの作成
実践方法・進め方 （箇条書き またはフロー）	<p><事業内容></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 民泊先での聞き取り調査「災害時のことと豪雨災害から身を守る知恵」 ・ 平成 23 年 9 月台風 12 号の災害地見学（総雨量 1,600 ミリで天然ダム形成） <p><事業スケジュール></p> <p>7 月 26 日夜 民泊先の方にインタビューを実施 （30 分—1 時間程度）</p> <p>7 月 27 日 10:00-11:00 災害地見学 11:00-11:30 まとめ（絵葉書記入や感想発表）</p>
準備、使用したもの	<p><人材>災害時や救助に携わった件を語る地元講師 1 名</p> <p><道具、材料>災害現場写真 5 枚、移動用バス</p>
参加人数	49 名（児童 35 名・教員 4 名・スタッフ 10 名）
経費の総額・内訳概要	※全額体験学習費
成果と課題	<p>【成果】 防災教育プログラムの作成</p> <p>【課題】 見学や講師の話を聞くなど、参加型体験が少ない傾向にあった。</p>
成果物	防災教育教材・プログラム 1

【実践プログラム番号： _____】※3

タイトル	防災教育プログラム検討会
実施月日（曜日）	平成 25 年 1 月 17 日（木）※予定
実施場所	三重県多気郡大台町久豆 大杉谷地域総合センター
担当者または講師	担当者・講師等の区分：講師 氏 名：端無徹也 氏 所属・役職等：NPO 法人みえ防災市民会議
所要時間または「コマ数×単位時間」	2 時間
プログラムのカテゴリ、形式※4	ワークショップ
活動目的※5	被災地における防災教育プログラムの改善・作成
達成目標	現状のプログラムの改善 1・新規プログラムの作成 1
実践方法・進め方（箇条書きまたはフロー）	NPO 法人みえ防災市民会議より講師 1 名の派遣を受け、昨年夏に実施した防災教育プログラムへのアドバイスを頂くとともに、現地視察を実施し、新たな防災教育プログラムを作成する。
準備、使用したもの・人材 ・道具、材料等	<人材> NPO 法人みえ防災市民会議 講師 1 名 <道具・材料> 昨年度の報告書
参加人数	4 名
経費の総額・内訳概要	58,000 円（謝金・交通費 28,000 円、教材費 40,000 円）
成果と課題	【成果】 専門家に大変具体的なアドバイスを頂き、新規プログラム開発ができた。改善という意味では、新規プログラムを旧プログラムに入れ込む形で行うこととした。 専門家の方のアドバイスが的確だったため、被災地という現場にこだわり過ぎていたことが反省点として上がった。 被災地はどんどん復旧していくため、現場にこだわり過ぎず、柔軟にその被災地経験を活かす方向性がよいという結論に至った。 【課題】 ・防災教育は多様性があるため、学校のニーズにより、体験内容も多様になる。 ・ここで学ばなければならない内容と地域で学ぶべき内容があり、適している場合を検討しなければならない。
成果物	新規プログラム 3 種類程度（予定）

4. 苦勞した点・工夫した点

<p>プランの立案 と調整で 苦勞した点 工夫した点</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・防災教育プログラムは学校教育において、既に数回の実績があったが、宿泊体験プログラムの中に挿入するという新しい試みであった。そのため、2泊3日のどの部分に防災教育の要素を入れることが効果的かということ話しあった。その結果、民泊体験を実施していたので、民泊の方に聞き取り調査をして災害について自分たちで学習を進める方法をとったので、最終日に被災地見学を実施することとした。 ・実施に災害地に行くということで安全性について検討した。 ・現地の方の話が聞きたいということで、地元の方で話をしていただけの方を選定した。
<p>準備活動で 苦勞した点 工夫した点</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・安全性の確認のため、工事事業者の会社や現場担当の方に説明に行くなどした。 ・災害現場が復興されてしまっていたため、どのように災害の恐ろしさを伝えられるか、当日の航空写真等を行政側から提供をうけた。 ・事前授業の内容は学校に任せたが、大台町内でも災害が少ない地域だったため、豪雨災害に対する経験が少なかった（他の大台町の子どもたちは避難等の経験あり）。 ・災害講師は地元の方だったため、話が苦手等とのことで、引き受けていただく説得に時間がかかった。
<p>実践に 当たって 苦勞した点 工夫した点</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・当日は大変暑い日であり、児童の健康管理に留意した。 ・水分摂取や帽子を着用すること、また、講師に一か所で話す時間の短縮をお願いするなどした。 ・声が通りやすいようにマイクを使用した。 ・予想外にトラックの往来が多く、道路での安全に留意した。

5. 他の団体、地域との連携

協力・連携先の分類	団体名、組織名	協力・連携の内容
学校・教育関係・ 同窓会組織	大台町立日進小学校	授業実施学校
保護者・ PTAの組織	なし	
地域組織	地元の被災者	当日講師
国・地方公共団体・ 公共施設	三重県 大台町	災害写真の提供
企業・ 産業関連の組合等	工事関係者	当日の講師及びトラ ック安全運転
ボランティア団体・ NPO法人・NGO 等	NPO 法人みえ防災市民会議	プログラムの改善・新 規プログラムの開発 へのアドバイス
職業、職能団体・ 学術組織、学会等	なし	

6. 成果と課題（実践したプラン全般について）

<p>成果として 得たこと</p>	<p>災害被災地であるという記憶は薄まっていく。特に災害地は急速に復興するし、災害の怖さは被災当事者であっても時と共に薄れる。しかし、防災教育プログラムを被災地で実践していくことは、被災者として、災害の恐ろしさや防災の重要性を常に意識させることに繋がっていく。</p> <p>学校教育現場で防災教育のニーズは高く、被災地が率先して、プログラム提供をしていくことは重要な意味があると感じた。</p> <p>実際被災経験した場合と、そうでない場合は、理解度が異なっている。例えば災害地の写真を見せて比較させるつもりでも、災害の影響が伝えられないことなどである。</p> <p>災害地で学べることは災害の大きさばかりに注目するのではなく、周囲の山の環境であったり、谷筋、尾根筋等地形を読む等災害地の発生原因を調べるような学習をすることも重要である。復興が進む今、現場で学ぶべきものもシフトが必要である。</p> <p>今回の防災教育プログラム実施校では小学校5年生の理科「流れる水と働き」の単元にて、防災教育での学習内容を生かした授業が実施された。豪雨災害の視点から「流れる水の働き」を学習したということであったが、防災教育のおかげで授業が深く展開されたということであった。先生も今回使用した写真を改善し、教材を作成したと報告を受けた。</p> <p>実践活動として、防災の専門家の方にアドバイスを頂くことができた。これまで被災地の現場にこだわり過ぎていたため浮かばなかった視点をたくさんいただくことができた。例えばスコップやジョレンの使い方や山から水を引く方法の実践などである。実際、被災地だった時に活動で使っていたことではあったが、なかなかそれらの事象が防災教育に当てはまるという意識がなかった。</p>
<p>全体の反省・ 感想・課題</p>	<p>防災教育は毎年実践していたが、今回、実践した内容を専門家の方を交えて練り上げたことは、これまでにない効果的なプログラム作成につなげることができた。また、学校側への提供では、先生方からフィードバックをいただくなど、これまでにない視点で振り返ることができた。</p>
<p>今後の 継続予定</p>	<p>毎年防災教育は継続していく予定である。平成25年度は大台町4小学校での体験時に今回の新しく作成した防災教育プログラムを実施する予定である。</p> <p>今回専門家を派遣いただいた NPO 法人みえ防災市民会議の方とは情報提供等を続ける予定である。</p>

7. 自由記述欄



災害地での講師説明



写真等教材を使つての解説



災害地見学